

# 東京都小金井市の市民農園と江戸野菜の復活に関わる市民意識

木保 美樹男 (東京学芸大学環境教育研究センター)

## The Awareness of Citizens on Community Gardens and the Revival of Edo Vegetables in Koganei-shi, Tokyo

Mikio KIMATA, Field Studies Institute for Environmental Education,  
Tokyo Gakugei University

### 1. はじめに

栽培植物の在来品種の種子を保存するためには、研究機関で保存する方法と農家が保存する方法がある。研究機関の施設による保存は緊急避難として重要であるが、種子貯蔵庫に入れた時点で在来品種としての小進化が止まる。これまで雑穀や野菜を中心に栽培植物の生物文化多様性の調査研究をし、大学において種子・標本の収集・保存(生息域外保全)をしてきたが、小規模自給農耕が在来品種の小進化を止めることなく、実質的に多様な在来品種種子を保存(生息地保全)し、家族の食料自給に役立っていることが見えてきた。

生物多様性条約第10回締約国会議において提言したように、生物多様性には文化多様性が伴っている(木保 2011, 2012)。野生植物であれ、栽培植物であれ、生物文化多様性は自然や農耕地の現場における保全が重要である。不安定な地球環境と国際社会、自然災害と人為災害に応じて、エネルギー転換や生活様式の移行(トランジション)が求められ、生物文化多様性保全と食料安全保障を確実にするために、自給農耕の場であるホームガーデンでの自家採種により、適応進化による地域固有の種、在来品種をよく維持してきたことが最近のヨーロッパを含めた調査研究によって次第に明らかになってきた(Cotton 2002)。

ホームガーデンにおいて地域固有の在来品種(遺伝資源種子)を確保し、家族と地域社会を守るための自給農耕によって食料安全保障を実現する可能性を調査研究する必要がある(西川 2012)。また、アメリカやオーストラリアの

ような大規模農業を目指してきた中央政府による農業政策および国際食糧会社によるグローバル化やコモディティ化に依存しすぎず、市民による小規模自給農耕の有効性を検証して、政策提言に結び付けたい(野坂 2000、中村 2004、山下 2004)。基礎研究に基づいて政策提案することは研究者の責任の範囲にあると考える。

生物文化多様性保全は国際および国家的な事業でもあるが、実際には小規模農家や市民レベルでの生物文化多様性の農耕地保全活動が重要である。自給農耕による生物文化多様性保全、家族の食料安全保障、これらによる実自給率の増加の可能性と有効性を明らかにする必要がある。

日本の市民農園のレベルとは異なって、欧米のホームガーデンは面積も広く、食料自給に大きく貢献している。たとえば、ソ連崩壊後の政治的混乱期においてもダーチャ(自給農耕地)があったので、餓死者はおらず、家族食料安全保障は機能した。ロシアのジャガイモの大半はダーチャで生産されているという(豊田 2005)。さらに、環境学習(CEPA 伝達・教育と公共意識)により、市民による新しい公共性の考え方を提示し、普及・啓発する。市民による新たな公共は税金によらない任意の寄附などに基づき、行政に依存しすぎず、市民自ら公共のために作業することと理解する。このような社会的共通資本(宇沢 2000; 宇沢弘文・内橋克人 2009)への市民の参加、新しい公共のあり方を現場での基礎研究の中から検討したい。

市民の側の自助に重きを置く公共の視点は日

本ではこれまで弱かったものであり、今後なくてはならないものになる。ヨーロッパは市民革命を経ているので、市民主体の公共、社会的共通資本への意識が深くあり、市民自ら生物文化多様性を保全し、クラインガルテンなどの市民農園で自給農耕を楽しみながら、食料安全保障を確実にし、居住困難地には直接保障をして、地域自治を尊重している。

本論では、まず首都の衛星都市である小金井市の市民農園などにおける栽培植物の種、品種の多様性、とりわけ江戸野菜の復活活動、および食料自給に関する実態調査を行い、家族と地域レベルでの食料安全保障の可能性を検討する。

## 2. 市民農園に関わる法律

桜井 (1994) によれば、約 20 年前のデータではあるが、東京都では「市民農園に対する援助を希望する農家は少なかった (15.8%)」。この理由は、農地の土地資産としての収益性が極めて高いので、農家は農地を自己所有のまま宅地並み課税に相当する固定資産税を支払うことができ、所有地の一部を収益性の高い賃貸住宅や駐車場などとして運用すればよかった (東京都「都市農業施設に関する意向調査の概要」1992)。

営農困難な農地は市民農園などとして活用することが望ましいが、民間所有の農地を利用した市民農園を普及するには相続税問題の解決が必要であったので、国の相続税納税猶予制度が望まれていた。都内の市民農園は普及半ばで、利用できる区画が狭く、また、区画数も面積も著しく不足しており、応募倍率は高い現状にある。練馬区は農協が運営するレジャー農園と区が農家から借地して開設している区民農園が 47 か所あり、区条例を定めて積極的に市民農園制度を進めてきた。

しかし他方で、都市化や農山村の過疎・高齢化など社会的環境の著しい変化にともない、農地法や生産緑地法が度々改正されてきた。農林水産省は「食料・農業・農村基本計画」(閣議決定 2005 年) の中で、市民農園を「都市と農

村の交流の促進」、「都市およびその周辺の地域における農業の振興」に資する取組と位置付け、市民農園の開設の要件を緩和するなど、農地の利用機会の拡大を図ってきた。特定農地貸付けに関する農地法等の特例に関する法律 (1989、改正 2005) および市民農園整備推進法 (1990) が整備されたことにより、市民農園の開設は条件付きながらいくつかの許可が不要あるいは可能になり、相続税納税猶予制度など、農家や自治体にとってもメリットが多くなった。この報告書には、市民農園の設置状況、利用料金の状況、運営・管理に関するアンケート調査結果、先進的な事例などが紹介されている (農林水産省関東農政局 2006)。

## 3. 調査対象地

東京都小金井市には 91 ヘクタールの農地 (市面積の約 8%) があり、このうち 75 ヘクタールが生産緑地となっている。193 戸の農家のうち、112 戸が販売農家で、直売所 (65 戸) や地元スーパーマーケットに出荷している (地域計画研究所 2009)。上述の桜井 (1994) によれば、農地の半分近くが植木畑という特徴がある。

小金井市農業委員会の市民意向調査によると、地域環境保全 (63.3%) と新鮮野菜の供給 (53.6%) が高い回答であった。この他に、農業体験や環境教育の場、市民農園の利用が強く望まれていた。生産緑地地区の指定を希望しない農地に関しても、農家の営農意欲が高いので、農地を市に市民農園・学校農園として貸付する場合は宅地並課税額を軽減する制度を望む回答 (72%) が多かった。

三鷹市・小金井市地域活用プロジェクト検討委員会は、リーディングプロジェクトの一つとして「江戸東京野菜創・再生プロジェクト」を提案し、江戸東京野菜と郷土料理の復活を図り、栽培体験、食体験の機会を提供することにした (三鷹市・小金井市・東京都 2006)。この検討委員会に先立って、小金井市公民館貫井南分館では NPO 法人ミュゼダグリの企画提案により、講座「小金井を江戸野菜で元気に」(2004) の学びの成果をふまえて、東京学芸大学環境教

育研究センター彩色園の農地を利用して（木俣 2012）、成人大学講座「江戸野菜をつくろう」を 2005 年から開始し（公民館貫井南分館 2005）、現在（2013）まで継続している。ミュゼダグリに、東京学芸大学の学生サークル・ちえのわ農学校が協力して、江戸東京たてもの園の野外展示農家の傍らにも畑を借用し、見本園を造った。たてもの園でのイベント「江戸の小正月」（2007）では、伝統小松菜、亀戸大根の江戸雑煮、山梨県小菅村産（NPO 自然文化誌研究会／植物と人々の博物館雑穀栽培見本園）のアワ入りおむすびなどを提供した。

ここでいう江戸野菜は、京野菜のように明確な基準に基づいて定義されておらず、江戸時代に江戸・江戸近郊で栽培されていた野菜、明治時代初期にヨーロッパから導入され、東京発となった西洋野菜とされている。主な野菜は、亀戸大根、練馬大根、大蔵大根、金町小かぶ、東京長かぶ、馬込大太三寸人参、谷中しょうが、滝野川ごぼう、伝統小松菜、芯とり菜、のらぼう菜、下山千歳白菜、新宿一本ねぎ、馬込半白節成きゅうり、奥多摩わさび、東京うど、後関晩生べかな、三河島菜、三河島枝豆、八丈おくら、小笠原かぼちゃ、関野栗などである（小金井市農業委員会 1989；タキイ種苗（株）出版部 2002；大竹 2009a, 2009b；高橋栄一 2008）。

#### 4. 調査および解析方法

小金井市の市民農園の利用者、東京江戸野菜を使用している食堂、小金井市貫井南公民館成人大学講座「江戸野菜をつくろう」参加者に対して、直接手渡しによる質問紙法により（100 通）、2012 年 12 月に構造化調査を実施した（付表）。回収された質問紙調査票のデータは EXCEL に入力後（有効回答数 58、回収率 58%）、IBM-SPSS ver.21 を用いて、基礎統計、偏相関分析、主成分分析、因子分析、および重回帰分析を行った。

自由記述に関しては、同解析ソフトの Text Analytics for Surveys ver.4.0.1 により、テキスト分析を行った。また、市民農園関係者 6 名に対しては市民農園用自由記述質問紙（半構造化）

により、2 名に対しては直接面接聴取（フリートークキング）を行い、市民農園の実状について意見を聞いた。さらに、「小金井環境フォーラム」（2013 年 2 月）において活動紹介ポスターの展示期間（7 日間）に、同じアンケート用紙を置き、参観者に対する調査を試みたが、返送用封筒がすぐに紛失し、有効回答数 2 を得たに過ぎなかったため、この解析はできなかった。その後、第 32 回環境教育セミナー（2013 年 3 月）の参加者（40 名）に対して同じアンケート用紙を配布し、有効回答 12（回収率 30%）を得たため、これらの結果は補論として別に報告する。

#### 5. 調査結果

調査対象者の属性および江戸野菜に関する回答を表 1 にまとめた。回答者は男性 32 名（55.2%）、女性 24 名（41.4%）であった。年齢層は 60 歳代が 29 名（50%）で半数を占め、ほかは 70 歳代（25%）、50 歳代（12.1%）、40 歳代・30 歳代（ともに 5.2%）、20 歳代（1.7%）の順であった。消費者は 33 名（56.9%）、生産者は 2 名（3.4%）、その他 17 名（29.3%）は市民農園利用者と考えられる。

江戸野菜についてはほとんど（91.4%）が認識しており、江戸野菜の存在を知ったのは大方が 3～5 年前で、江戸野菜に関するイベントには 21 名（36.2%）が参加し、江戸野菜の復活に改善のための意見を 23 名（39.7%）がもち、江戸野菜の生産と消費に関しては大方（68.9%）が継続したいとしている。

江戸野菜の復活について知った契機は、表 2 に示したように、小金井市報を読んで（41.2%）、知人から聞いて（13.2%）が半数以上を占めていた。農地で栽培されているのを見て（7.4%）もあったが、八百屋の店頭や食堂のメニューで見て（ともに 2.9%）は少なかった。江戸野菜を選ぶ理由は、表 3 に示したように、地元の農家を応援できる（19.4%）が最も多く、続いて 10% 以上の回答は、地域を活性化できる、旬のものが食べられる、新鮮である、生産者の顔が見えて安心、味が美味しい、などであった。食料自給率の向上（7%）と価格が安い（1.6%）

表1 調査対象者属性および江戸野菜への回答 (有効回答数 58)

| 項目       | 事項 回答数、%  |
|----------|---|
| 性別       | 男性32(55.2%)、女性24(41.4%)、不明2(3.4%)   |
| 年齢層      | 20代1(1.7%)、30代3(5.2%)、40代3(5.2%)、50代7(12.1%)、60代29(50.0%)、70代15(25.9%)          |
| 消費者/生産者  | 消費者33(56.9%)、生産者2(3.4%)、その他17(29.3%)、不明6(10.3%)                                 |
| 江戸野菜     | 知っている53(91.4%)、知らない5(8.6%)  |
| いつ知ったか   | 5年以上前22(37.9%)、5~3年前12(20.7%)、3~1年前15(25.9%)、1年以内4(6.9%)、半年以内1(1.7%)、不明4(6.9%)  |
| 江戸野菜イベント | 参加した21(36.2%)、参加していない23(39.7%)、不明7(12.1%)                                       |
| 江戸野菜の改善  | ある23(39.7%)、ない23(39.7%)、不明12(20.7%)   |
| 消費/生産の継続 | とても思う18(31.0%)、思う22(37.9%)、普通8(13.8%)、あまり思わない2(3.4%)、思わない0(0%)、不明8、平均 4.10±0.83 |

表2 江戸野菜を知った契機

| 項目             | 回答者数(%)   |
|----------------|-----------|
| 農地で栽培されているのを見て | 5(7.4%)   |
| 八百屋などの店頭で見て    | 2(2.9%)   |
| 食堂のメニューで見て     | 2(2.9%)   |
| 小金井市報を読んで      | 28(41.2%) |
| 駅の掲示を見て        | 0(0%)     |
| 市の掲示板のチラシを見て   | 4(5.9%)   |
| 配布されたチラシを読んで   | 2(2.9%)   |
| 知人から聞いて        | 9(13.2%)  |
| その他            | 16(23.5%) |
| 合計 重複回答あり      | 68        |

表3 江戸野菜を選ぶ理由

| 項目               | 回答者数(%)   |
|------------------|-----------|
| 生産者の顔が見えて安心である   | 16(12.4%) |
| 価格が安い            | 2(1.6%)   |
| 旬なものが食べられる       | 18(14.0%) |
| 新鮮である            | 17(13.2%) |
| 地元の農業を応援することができる | 25(19.4%) |
| 味が美味しい           | 15(11.6%) |
| 地域を活性化することができる   | 18(14.0%) |
| 食料自給率の向上が見込める    | 9(7%)     |
| その他              | 9(7%)     |
| 合計(重複回答あり)       | 129       |



図1 市民農園の初夏(上)と初秋

は回答者が少なかった。

回答者が知っている江戸野菜の種・品種については表4に示した(重複回答あり)。江戸野菜としてもっともよく知られている野菜は小松菜(35名)で、亀戸大根(25名)、のらぼう菜・金町小かぶ(ともに17名)、半白きゅうり(15名)、東京長かぶ(14名)、東京うど(12名)、大蔵大根(11名)などであった。あまり知られていない江戸野菜もあったが、回答者によっては、少ないながら、東京産であれば江戸野菜であると認識していた。

他方、市民農園(栗山80区画、12m<sup>2</sup>)で栽培されていた主な野菜は、ダイコン(61名、76.3%)、ホーレンソウ(53.8%)、ブロッコリー(47.5%)、ハクサイ(36.3%)、シュンギク(33.8%)、レタス(32.5%)、カブ・キャベツ(ともに27.5%)、カリフラワー(25%)、ネギ(21.3%)などであった。1区画当たりの栽培種数は、2~14の範囲で、平均値は6.31であった(図1)。

表4 知っている江戸野菜の種・品種および市民農園(80区画)で栽培されている野菜の種・品種

| 回答数 | 江戸野菜の種・品種  | 栽培者数(%)  | 栽培野菜の種・品種 1)  |
|-----|--|----------|---|
| 35  | 小松菜  | 61(76.3) | ダイコン  |
| 25  | 亀戸大根   | 43(53.8) | ホーレンソウ  |
| 11  | 大蔵大根   | 38(47.5) | ブロッコリ   |
| 8   | 練馬大根   | 29(36.3) | ハクサイ  |
| 3   | だいこん   | 27(33.8) | シュンギク   |
| 17  | 金町こかぶ  | 26(32.5) | レタス   |
| 2   | こかぶ  | 22(27.5) | カブ、キャベツ   |
| 14  | かぶ   | 20(25.0) | カリフラワー  |
| 14  | 東京長かぶ  | 17(21.3) | ネギ  |
| 17  | のらぼうな  | 15(18.8) | コマツナ、ミズナ  |
| 15  | 半白きゅうり   | 14(17.5) | ニラ  |
| 2   | 滝野川にんじん  | 11(13.8) | ニンジン  |
| 9   | 三寸人参   | 10(12.5) | チンゲンサイ  |
| 11  | にんじん   | 8(10.0)  | アブラナ  |
| 12  | 東京うど   | 6(7.5)   | ノザワナ  |
| 9   | 東京べかな  | 5(6.3)   | ジャガイモ、メキャベツ   |
| 7   | しんとりな、寺島なす、谷中生姜  | 4(5.0)   | カソオナ、コマツナ、トウガラシ   |
| 5   | まくわうり  | 3(3.8)   | イチゴ、タイサイ、チュウゴクヤサイ、ナス、パ<br>ジル、ハツカダイコン、ピーマン   |
| 4   | 千住ねぎ   |          |   |
| 2   | 拝島ねぎ   |          |   |
| 3   | ねぎ   |          |   |
| 4   | 滝野川ごぼう   |          |   |
| 1   | 日本ほーれんそう   |          |   |
| 3   | ほーれんそう   |          |   |
| 3   | 内藤とうがらし  |          |   |
| 2   | じゃがいも  | 2(2.5)   | コネギ、セロリ、ワケギ   |
| 1   | 早稲田みょうが、関野栗、しゅんぎ<br>く、きゃべつ、かりふらわー、日本か<br>ぼちゃ、奥多摩わさび、三浦大根、<br>ぶろっこりー、明日葉、竹の子、馬<br>込なす、ちんげんざい、ざつまいも<br>ざにーれたす、はくさい、とうもろこ<br>し、えだまめ、れたす | 1(1.3)   | アスパラガス、アップルミント、エンドウ、オレ<br>ンジミント、カボチャ、キョウナ、ケール、コカ<br>ブ、ゴボウ、サトイモ、シシトウ、シソ、シヨウゴ<br>インダイコン、シヨクヨウキク、スイゼンジナ、<br>タマネギ、チコリ、トマト、ナガイモ、ノラボウ<br>ナ、パセリ、花キク、ハボタン、マリーゴールド、<br>ミウラダイコン、ミツバ、ラッキョ、レモンバ<br>ウム |

17(21.3) トンネル栽培で実生のため、同定できず不明

1)栽培種数平均 6.31± 2.63、範囲2~14、東西畝/南北畝=68/12

各質問項目に対する5段階評価を表5に示した。質問 a1 江戸野菜の認知時期は、平均値 3.93 で、おおよそ5年から3年の範囲であった。質問 a4 江戸野菜の生産消費の継続については、平均値 3.90 で、積極的である。

質問 b1 地域に自然が多いかについては、平均値 3.78 で、回答者によって評価は分かれるが、良好な評価である。質問 b2 都市農業に関心が

表5 質問項目の5段階評価の平均値

| 質問項目             | 平均値        |
|------------------|------------|
| a1江戸野菜の認知時期      | 3.93± 1.08 |
| a4江戸野菜の生産消費の継続   | 3.90± 1.10 |
| b1地域自然多い         | 3.78± 0.79 |
| b2都市農業に関心        | 4.20± 0.91 |
| b3地産地消に関心        | 4.18± 0.75 |
| b6都市農地保全のための市民農園 | 4.39± 0.78 |
| b7家族や地域の食料安全保障   | 4.25± 0.88 |
| b8市民農園増設         | 4.64± 0.62 |
| b83市民農園の貸借面積     | 2.65± 0.86 |
| b84市民農園の使用料金     | 3.10± 0.56 |
| b9農地に関する法律・条例の存在 | 3.09± 1.12 |

表6 質問事項における偏相関分布

|           | a4      | b1      | b2      | b3      | b6      | b7      | b8     | b83     | b84      | b9       |
|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|----------|----------|
| a4江戸野菜の継続 | 1       | 0.263   | 0.410*  | 0.603** | 0.293   | 0.247   | 0.382* | 0.042   | 0.059    | 0.059    |
| b1地域自然多い  | 0.263   | 1       | 0.049   | 0.019   | 0.396** | 0.220   | 0.101  | -0.031  | -0.088   | -0.170   |
| b2都市農業関心  | 0.410** | 0.049   | 1       | 0.762** | 0.345*  | 0.471** | 0.318* | 0.183   | -0.284   | 0.141    |
| b3地産地消関心  | 0.603** | 0.019   | 0.762** | 1       | 0.340*  | 0.407** | 0.315* | -0.349* | -0.311*  | 0.093    |
| b6都市農地の保全 | 0.293   | 0.396** | 0.345*  | 0.340*  | 1       | 0.589** | 0.316* | 0.049   | 0.007    | -0.253   |
| b7食料安全保障  | 0.247   | 0.220   | 0.471** | 0.407** | 0.589** | 1       | 0.294  | 0.171   | -0.117   | -0.151   |
| b8市民農園増設  | 0.382*  | 0.101   | 0.318*  | 0.315*  | 0.316*  | 0.294   | 1      | 0.125   | 0.223    | -0.040   |
| b83市民農園面積 | 0.042   | -0.031  | -0.183  | -0.349* | 0.049   | -0.171  | 0.125  | 1       | 0.413**  | -0.120   |
| b84市民農園料金 | 0.059   | -0.088  | -0.284  | -0.311* | 0.007   | -0.117  | 0.223  | 0.413** | 1        | -0.532** |
| b9農地法律    | 0.059   | 0.170   | 0.141   | 0.093   | -0.253  | -0.151  | -0.040 | -0.120  | -0.532** | 1        |

表7 多変量解析の結果概要

| 1) 主成分分析 |          |        | 2) 重回帰分析       |        |        |         |
|----------|----------|--------|----------------|--------|--------|---------|
| 成分       | 主成分スコアの分 | 累積寄与率  | モデル            | 重相関係数R | F検定    | 有意確率    |
| 1        | 3.497    | 31.787 | 1              | 0.829  | 7.058  | 0.000   |
| 2        | 2.220    | 51.973 |                |        |        |         |
| 3        | 1.222    | 63.079 |                |        |        |         |
| 成分       |          |        | 標準化係数          | 検定     | 偏相関係数  |         |
|          | 1        | 2      | 13 江戸野菜認知      | -0.216 | -1.727 | -0.292  |
|          |          |        | 4 江戸野菜の継続      | -0.179 | -1.127 | -0.195  |
| 江戸野菜認知   | -0.467   | 0.419  | b1 地域自然多い      | 0.065  | 0.512  | 0.090   |
| 江戸野菜の継続  | 0.646    | 0.247  | b2 従属変数 都市農業関心 |        |        |         |
| 地域自然多い   | 0.142    | 0.489  | b3 地産地消関心      | 0.791  | 4.411  | 0.615** |
| 都市農業関心   | 0.844    | -0.033 | b6 都市農地保全      | -0.020 | -0.142 | -0.025  |
| 地産地消関心   | 0.849    | 0.009  | b7 食料安全保障      | 0.207  | 1.562  | 0.266   |
| 都市農地保全   | 0.455    | 0.659  | b8 市民農園増設      | 0.048  | 0.388  | 0.068   |
| 食料安全保障   | 0.649    | 0.351  | b83 市民農園面積     | 0.164  | 1.225  | 0.212   |
| 市民農園増設   | 0.517    | 0.311  | b84 市民農園料金     | 0.014  | 0.085  | 0.015   |
| 市民農園面積   | -0.480   | 0.494  | b9 農地法律        | 0.140  | 0.995  | 0.173   |
| 市民農園料金   | -0.459   | 0.609  |                |        |        |         |
| 農地法律     | 0.267    | -0.689 | モデル            | 重相関係数R | F検定    | 有意確率    |
|          |          |        | 2              | 0.695  | 2.982  | 0.009   |
|          |          |        | 標準化係数          | 検定     | 偏相関係数  |         |
|          |          |        | 13 江戸野菜認知      | 0.027  | 0.161  | 0.029   |
|          |          |        | 4 江戸野菜の継続      | 0.069  | 0.332  | 0.059   |
|          |          |        | b1 地域自然多い      | -0.049 | -0.303 | -0.054  |
|          |          |        | b2 従属変数 都市農業関心 | 0.343  | 1.562  | 0.266   |
|          |          |        | b3 地産地消関心      | -0.164 | -0.564 | -0.099  |
|          |          |        | b6 都市農地保全      | 0.458  | 2.831  | 0.448** |
|          |          |        | b7 従属変数 食料安全保障 |        |        |         |
|          |          |        | b8 市民農園増設      | 0.120  | 0.759  | 0.133   |
|          |          |        | b83 市民農園面積     | -0.194 | -1.120 | -0.194  |
|          |          |        | b84 市民農園料金     | -0.129 | -0.615 | -0.108  |
|          |          |        | b9 農地法律        | -0.164 | -0.904 | -0.158  |

あるかについては、平均値 4.20 で、関心は高い。  
 質問 b3 地産地消に関心があるかについては、  
 平均値 4.18 で、これにも高い関心を示している。  
 質問 b6 都市農地の保全に市民農園は役立つか

については、平均値 4.39 で、市民農園をかなり  
 高く評価している。

質問 b7 都市農地や市民農園は災害などの際  
 に、家族や地域の食料安全保障に有効かについ

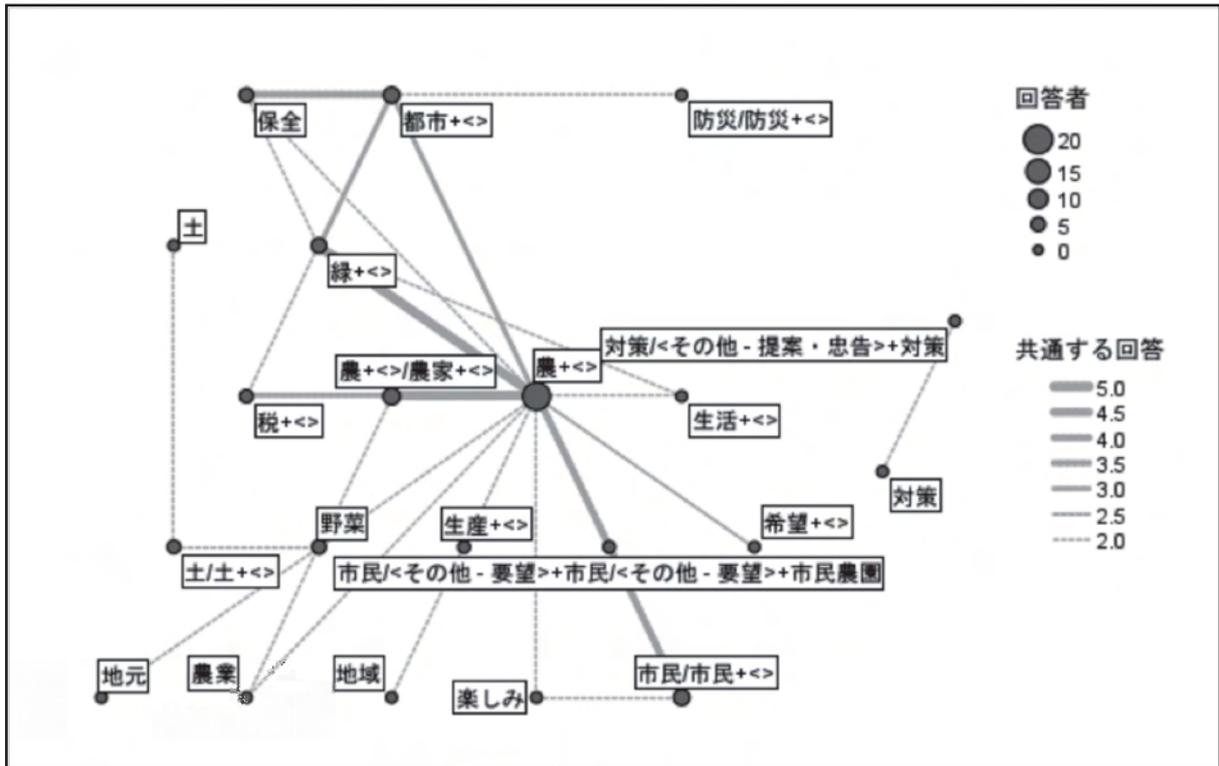


図2 質問 b5 都市農地の保全についての意見のテキスト分析 (有効回答数 31)

ては、平均値 4.25 で、高い期待が示されている。質問 b8 市民農園の増設については、平均値 4.64 で、とても高い要望を示していた。質問 b83 市民農園の貸借希望面積については、平均値 2.65 で、おおよそ 30m<sup>2</sup> から 15m<sup>2</sup> の範囲が求められていた。質問 b84 市民農園の使用料金については、平均値 3.10 で、おおよそ 5000 円程度が望まれている。質問 b9 農地に関する法律・条例の存在については、平均値 3.09 で、内容まで含めて十分に知られてはいなかった。

各質問事項の間の偏相関分析の結果を表 6 に示した。質問 a4 江戸野菜の継続を望むに対して、1%または5%レベルで有意な正の相関係数を示したのは、都市農業と地産地消に関心、市民農園の増設であった。

質問 b1 地域に自然が多いは、都市農地の保全と有意な相関係数を示した。質問 b2 都市農業への関心は、江戸野菜の継続、地産地消への関心、都市農地の保全、食料安全保障、市民農園の増設と正の有意な相関係数を示したが、一方、市民農園の面積と料金に関しては負の相関

係数を示した。質問 b3 地産地消への関心は、江戸野菜の継続、都市農業への関心・保全、食料安全保障、市民農園の増設が有意な正の相関係数を示し、市民農園の面積・料金が負の相関係数を示した。質問 b6 都市農地の保全是、地域に自然が多い、都市農業・地産地消への関心、食料安全保障、市民農園の増設と有意な正の相関係数を示した。

質問 b7 は都市農業・地産地消への関心、都市農地の保全と有意な正の相関係数を示した。質問 b83 市民農園の面積は、市民農園の料金と有意な正の相関係数を示し、他方、地産地消への関心とは有意な負の相関を示した。質問 b84 市民農園料金は、市民農園の面積と有意な正の相関係数を示し、他方で、地産地消への関心、農地に関する法律とは有意な負の相関を示した。質問 b9 農地に関する法律は、市民農園の料金と有意な負の相関を示した。

多変量解析の結果を表 7 に示した。主成分分析における、第 1 主成分は、江戸野菜の継続、都市農業および地産地消への関心、食料安全保

障に関わるので、地域での食料生産を示している。第2主成分は、都市農地の保全、市民農園料金、農地法律に関わるので、都市農地の保全政策を示している。因子分析は有意な解析ができなかったので採用しなかった。重回帰分析では、従属変数を都市農業への関心としたモデル1では、地産地消への関心のみが1%レベルで有意であった。また、従属変数を食料安全保障としたモデル2では、都市農地保全のみが1%レベルで有意であった。

自由記述を求めた質問は、質問 b5 都市農地の保全についての意見（有効回答数31）、質問 b8 市民農園を増やしたほうが良い理由（有効回答数31）、および質問 b10 市民農園についての意見（有効回答数26）であった。これらの自由記述文に関して、テキスト分析（感性分析のみ）を行い、有効回答数と記述文量が多い質問 b5 の結果について、カテゴリを視覚化し、共通する回答を2から5として図2（グリッド・レイアウト）に示した。

質問 b5 に用いた語彙「都市、農地、保全」以外で、多く抽出された語彙のカテゴリは「市民（7）、緑+<>（6）、野菜（5）、税+<>（4）、土（4）」であった。これらの語彙以外に、少数ながら共通する回答2以上で、「地元・地域、楽しみ、希望、生産、生活、防災」などがあった（図2）。

質問 b8 に用いた語彙「市民農園」以外で、感性分析によって多く抽出された語彙のカテゴリは「野菜（9）、自分（6）」であった。「野菜」と「自分」は共通する回答（4）で相互関係が示された。このほか少数ながら共通する回答には、「美味しさ、食料、人、交流+<>、コミュニケーション、倍率、12m<sup>2</sup>、将来、地球規模」などがあった。

質問 b10 に用いた語彙「市民農園」以外で、感性分析によって多く抽出された語彙のカテゴリは「農地（8）、野菜（5）、農家+<>（5）、農業（4）」であった。カテゴリ「市民農園」に対して、共通する回答（2）のカテゴリは「野菜、農地、農家+<>、交流、多くの人、市民、住宅、

一区画、市」であった。共通する回答ではないが、「市民農園」に関して、「地域、宅地化、なくなってしまう、倍率、一期、生活、健康維持」などのカテゴリが示された。

市民農園やホームガーデンに関わってきた調査回答者6名の平均農業経験年数は13.5年、これらのうち2名は有機農業を行っている。種子の入手先は、農協、中小種苗店やホームセンターで購入、郷里から分譲、自分で育苗する人もある。肥料は大方の人が購入していた。栽培面積は3m<sup>2</sup>～120m<sup>2</sup>と範囲が広い。四季を通じて野菜の多くの種・品種を栽培している。品種の選択は、耐病性、接ぎ木、栽培が簡単、季節に適合する品種であり、在来品種を選んではいない。在来品種の保存の意義は良いこと、大事なこと、固定種の方が高く売れる、伝統野菜を継続してほしい、しかし、これらは栽培しにくいという意見もあった。

聞き取り調査の結果を次に要約する。1) 自給農耕での作付け品目は、家族の喜ぶ品目となり、ホーレンソウやジャガイモになる。買った方が安い野菜でも、栽培し、近所の人々に分かち合うことが楽しい。2) 小金井市には市民農園が7か所しかなく、土地の条件が悪い場所もある。応募倍率は4～5倍にもなる。高齢者が増えると市民農園の需要が増すが、土地を提供する農家は少ない。3) 農家は126戸、うち造園が36戸、果樹組合も36戸である。農業は経営が引き合わないのに、同情はするが、農家は不動産業を兼業し、市民農園は農家の税金対策という一面もある。行政は農地保全よりも、人口を増やして、税金収入の増大を図りたい。したがって市民農園には農地保全などという理念がない。農家と市民との対立の構図ができていく。4) 市民農園の栽培技術の高さは、研修会が行われていないにもかかわらず、指導員や長年ホームガーデンを行ってきた人が教え、市民農園貸借者間で教え合うことで、保たれていた。5) 在来品種を継承した方が良いが、栽培しても加工、調理されなければ、品種の多様化は望

めず、保存も困難になる。在来品種を残すには、需要を作り出す必要がある。6) 日々の暮らしに流され、四季を忘れ、身近なものも疎くなったしまった。7) 農家を保護しすぎているので、TPPに賛成である。グローバル競争は避けられないので、高品質の農産物を作れば売れる。それでも農業に保護は必要であり、食料は例外である。8) 練馬区は市民農園の面積も広いし、抽選に当たる確率も高い。生きがい、生きる意味を考える時代である。

## 6. 考察

自給農耕にもいくつかの類型がある。たとえば、1) コミュニティーガーデン、クラインガルテン、市民農園などのような地域社会の中に位置付けられるもの、2) ホームガーデン、キッチンガーデン、ダーチャなどのように家族に属するもの、3) 1995年農業センサスによる副業的農家、4) 山村の小規模自給農耕のような伝統的生業（農林業複合の一部）を構成するもの、などである（農文協 1989, Eyzaguirre and Linares 2004）。

本論は第1類型の市民農園を主題とするが、上述したように、国レベルでは市民農園に関しては法整備が進んできており、先進事例も蓄積されているにもかかわらず、市民農園の面積や設置数は全く不十分で、なかなか拡大せずに、普及が滞っていると考えられる。

小金井市にしても、20年以上前から市民農園の効用が論じられ、提案されており（小金井市農業委員会 1989）、かつ需要は増えるばかりで、利用希望者が多く、応募倍率は5倍を超えているにもかかわらず、市民農園の制度化（供給の拡大）は十分に進んでいない。これは農家、農協、市役所行政および市民の間に十分な意見交流がなく、都市計画に市民農園を確かに位置付けていないからに他ならない。

さらに、国や自治体における市民農園の役割の理解の中に、家族と地域レベルの食料安全保障、在来品種や郷土食のような生物文化多様性保全の行政策がまったく抜け落ちている。グローバルな商業主義、国家レベルの食料自給率

と輸出入産品や金融などの国際取引にばかり政策の焦点を当てているが、他方で、地域や家族レベルの細部にまで目配りして、為政者が行政策を実行することを望む。

世界でも日本でも、すべては各地域で、日常レベルの現場で起こることが発端となる。現場から発しない机上の美辞麗句、空論は一利なしとはしないが、百害はある。都市農地や農山村がその多面的機能を発揮するためには、多面的な視野での目配りが必要である。日常的な地産地消にしても、非日常的な災害時の避難場所にしても、食料の安全保障と生物文化多様性保全の重要さを認識して議論がなされているのではない。日常生活レベルでの地域市場を安定持続的に経営しておけば、災害などの非常時においても緊急食料の調達が可能にできる。東小金井駅前に、最近できた「黄金や」のような地場産農産物や商品を扱う店は、三陸海岸地域の道の駅の震災時の事例に見られたように、緊急時1週間にも有効に機能する（木俣 未発表）。農耕をとまなわぬ食教育ではなく、地域産品・在来品種を用い、郷土料理を伝える食農教育こそ、地域固有の伝統的知識を伝える、良好な環境学習プログラムといえる。

小金井市では江戸野菜を復活するためにいろいろな活動が行われてきた。上述したように東京学芸大学環境教育研究センター彩色園でも貫井南公民館の江戸野菜栽培講座が続いている。市民農園も市内7か所にあり、いろいろな野菜が作られている。市民へのアンケート調査では、市民農園と江戸野菜の必要性について積極的な意見があった。

江戸野菜については3～5年ほど前に小金井市報で知った市民が多く、その生産と消費に関しては大方が継続することに賛意を示していた（表1、表2）。江戸野菜を選ぶ理由は、地元農家を応援でき、地域を活性化し、生産者の顔が見える、新鮮な旬のおいしい野菜が食べられることとして評価していた。しかし、食料自給率の向上や食材価格についての関心は低かった（表3）。

江戸野菜として紹介されている種・品種は上

述した。これらを仮に江戸野菜とするなら、小松菜、亀戸大根などはよく周知されてきているが、滝野川ごぼうや奥多摩わさびなどのようにまだ、ほとんど江戸野菜として認識されていない野菜もあった(表4)。さらには、「江戸東京野菜」という表現(キャッチフレーズ)から、東京産であれば江戸野菜であると認識している回答者もあった。いわゆる江戸野菜も京野菜のようにしかるべき定義と保存制度を設けるべきである。

他方で、市民農園では江戸野菜はほとんど栽培の試みがなされていなかった。狭い区画と限られた借用期間では、ホームセンターなどで購入した種子や苗で、日常的な料理に使用するダイコン、ホーレンソウなどの栽培が優先されているといえる。1区画当たりの栽培種類数は幅広く2~14(平均6.3)で、特定の野菜しか作らない人から多様な野菜種を造っている人までいることが明らかになった。いわゆる慣行農法で肥料・農薬を多く施用する人もいたが、一方で、有機農法や炭素循環農法により有機肥料あるいはそれすら与えないで、無農薬栽培の人もいた。各農法の講習会などはまったく行われていないにもかかわらず、この市民農園の栽培技術は著しく高い。長年ホームガーデンをしてきた人や指導員(農家)が任意に技術を伝え、市民農園利用者間でも栽培法を互いに学び合うことがほどよく機能しているのである。

上述したように、江戸野菜の復活を地域振興の素材にし始めてから、次第に江戸野菜に対する認知が広がり、生産消費についても継続が望まれるようになってきた(表5)。回答者は地域の自然的環境は比較的良好とし、都市農業と地産地消への関心は高い。都市農地の保全に市民農園は役立っており、食料の安全保障にも有効であると考えている。市民農園の区画面積を倍加することを望みながら、使用料金に関してはおおそ現状維持を望んでいた。

偏相関分析(表6)の結果によれば、江戸野菜の継続を望む回答者は、都市農業、地産地消、および市民農園増設を求めている。これらは相互に正の相関関係が強かったので、市民農園を

めぐって総合的な認識がなされていると考えられる。一方で、市民農園の面積と料金には関心が高く、地産地消には関心が低かったので、市民農園の面積・区画が確保され自給的農耕が可能になれば、その家庭の野菜購入が抑制される一面もあると考えられる。

しかし、市民農園の面積も区画も少ないので、地産地消に影響を及ぼすというよりも、むしろ都市農業への理解を増進すると考えることができる。実際に、地産地消に関心がある回答者は、江戸野菜の継続と都市農業への関心が高いが、市民農園については関心が低いことから、都市農業への関心と市民農園による野菜自給は結びつけて考えられていない。また、回答者は食料安全保障についても関心が弱い。多変量解析(表7)の結果も、主成分分析の第一主成分は地域での食料生産、第二主成分は都市農地の保全政策であり、これらのことを裏付けている。重回帰分析でも、モデル1(従属変数:都市農業への関心)は地産地消への関心、モデル2(従属変数:食料安全保障)は都市農地保全のみが有意であったことから、市民農園による自給農耕は一連の課題とは認識されていない。すなわち、市民が自ら街の農地(市民農園)を耕作して、家族の食料を自給することに関しては、いまだに重要性が理解されていないと考えられる。

自由記述のテキスト解析の結果から、都市農地保全に対する意見では(図2)、カテゴリ「農地・農家」を中心にして、1)「緑+<>、都市、保全」がつながり、他方で、2)「市民農園、市民」がつながっている。都市農地の保全については市民の関心と認識はあるといえる。市民農園を増やした方が良い理由はカテゴリ「野菜」と「自分」のつながりが強いので、野菜栽培の個人的意味が明確に意識されている。

市民農園に対する少数意見の中に、カテゴリ「楽しみ・希望・美味しさ・健康維持」、「多くの人・交流・コミュニケーション」、「地元・地域・宅地化」、「生産・生活・食料・防災」、および「倍率・一区画」があった。これらは市民農園の意義と今後の課題を示している。たとえば、住民の高齢化にともない市民農園の需要が高まって

いるにもかかわらず、宅地化によって農地がさらに失われ、市民農園の増設がいつそう困難になる、などの課題である。

市民農園やホームガーデンに関わってきた6名へのさらに詳しい質問紙による半構造化調査および3名に対する面接調査フリートーキングの結果からは、1) 市民農園(自給農耕)は楽しみ、生きがいである、しかし、2) 市民農園の制度内容が不十分で、需要にこたえていない、3) 行政、農家、市民との協働事業の体制作りがない、4) 江戸野菜などの在来品種は大切であるが、伝統を継承するには、地域の中に需要を作り出さねばならない、などの課題が明らかにされた。

これまでの検討から、いくつかの課題が明確になった。東京都小金井市における市民農園の制度が、国の法制度の改正によってさらに市民農園が有効に拡大できる状況となっているにもかかわらず、小金井市、農協および民間団体も市民の需要にこたえていない。市民の側も市民農園の多面的な意義と高い応募倍率を根拠に、小金井市などに、市民農園の増設を求めるべきである。また、江戸野菜の復活は小金井市から始めた事業であるので、本来の事業の趣旨である小金井市の農業振興を思い起こして、市内の食堂メニューの増加に加えて、市民も市民農園や学校園で数多くある江戸野菜を少しずつでも栽培して、在来品種の保存と郷土食の継承を行うことによって、地域社会での地産地消の需要を確立する必要がある。

#### 謝辞

ホームガーデン研究会による調査にご協力くださった小金井市民の皆様に対して、お礼申し上げます。

#### 文献

地域計画研究所, 2009, こがねい新鮮野菜庭先直売所マップ&レシピ集, 小金井市市民部経済課・小金井市農業委員会, 77+36pp.  
Cotton, C.M., 2002, "Ethnobotany — Principles and Applications," John Wiley & Sons, Ltd., UK, 426pp. 木俣美樹男・石川裕子訳, 2004, 民族植物学—原理と応用, 八坂書房, 東京, 416pp.

Eyzaguirre, Pablo. B. and Olga F. Linares, 2004, "Home Gardens and Agrobiodiversity," Smithsonian Books, Washington, USA, 296pp.

Hopkins, Rob, 2008, Rob Hopkins, 2008, "The Transition Handbook from oil dependency to local resilience," Chelsea Green Publishing, White River Junction, Vermont, UK, 240pp.

木俣美樹男, 2011, 生物多様性条約締約国会議 COP10 の辺境にて, 民族植物学ノオト 4: 33-44.

木俣美樹男, 2012, 有機農業による野菜の生物文化多様性保全, 環境教育学研究 21: 3-19.

木俣美樹男, 2012, 持続可能な社会づくりを目指す「地域に根ざした環境教育」モデル構築事業資料集 24-27, ECOPLUS, 東京.

小金井市農業委員会, 1989, ふるさと・小金井・農業—みどり豊かな未来へ, 本編 181pp., 付録記録写真集 55pp.

公民館貫井南分館, 2005, 江戸野菜を作ろう! 実技講座(17年度公民館貫井南分館成人大学講座), 小金井市公民館.

農文協, 1989, 市民農園クラインガルテンの世界から—農のあるまちづくり, 22pp.

三鷹市・小金井市・東京都, 2006, 水湧くプロジェクト構想—三鷹市・小金井市地域資源活用プロジェクト(みず・みどり・江戸の記憶から始める地域深耕ルネッサンス), 東京都, 36pp.

中村敦夫, 2004, さらば欲望の国, 近代文芸社, 東京, 197pp.

西川芳昭, 2012, 生物多様性を育む食と農—住民主体の種子管理を支える知恵と仕組み—, コモンズ, 東京, 235pp.

農林水産省関東農政局, 2006, 平成17年度関東食料・農業・農村情勢報告, 330pp.

野坂昭如, 2000, かくて日本人は餓死する, PHP 研究所, 東京, 195pp.

大竹道茂, 2009a, 江戸東京野菜—物語編, 農文協, 東京, 207pp.

大竹道茂, 2009b, 江戸東京野菜—図鑑編, 農文協, 東京, 159pp.

桜井良治, 1994, 東京都の生産緑地の保全と計画的市街化形成, 法経論集 72:13-44.

高橋栄一, 2008, 東京人—特集東京発とれたての野菜, 23(10), 都市出版株式会社.

タキイ種苗(株)出版部, 2002, 都道府県別地方野菜大全, 農文協, 東京, 359pp.

豊田菜穂子, 2005, ロシアに学ぶ週末術—ダーチャのある暮らし, WAVE 出版, 東京, 183pp.

宇沢弘文, 2000, 社会的共通資本, 岩波書店, 東京, 239pp.

宇沢弘文・内橋克人, 2009, 始まっている未来—新しい経済学は可能か, 岩波書店, 東京, 182pp.

山下惣一, 2004, 農から見た日本—ある農民作家の遺書, 清流出版, 東京, 262pp.